



【民数記：神に数えられる信仰の民】

民数記13章26節-14章12節／今週暗唱聖句：民数記14章8節

説教者：鄭南哲牧師

梅雨に入った一週間愛する信仰の家族であるクリスチャンプレイズチャーチのみなさん！一週間もお元気でしたか。梅雨の時期にもCSの小さな子どもたちから始め、マリヤ会の年配の方々に至るまでみなさん体調が守られ、主の豊かな平安でみんなの心が守られますよう切に祈りもうしあげます。

そして、今日は特別に子供祝福の主日として礼拝をささげていますが、みなさんの子供たちの上、特に我々のクリスチャンプレイズチャーチにかよっている子供たちの上に神様の豊かな祝福と力と知恵をお与えて下さるように主イエスキリストの御名によってお祈り申し上げます。アーメン！

本来旧約講解のメッセージと使徒の働きメッセージをジグザグする予定でしたが、旧約の始めである創世記から出エジプト記、レビ記、民数記、申命記までの5書を合わせて“モーセの5書(神が神の人モーセを通して記録するようにされた御言葉)”と言われ、創世記から申命記まで順番につながっているため、まず、神様がモーセを通して記されたこの5書の最後の申命記まで来週にかけて続けてから本来通りに使徒の働きの講解のメッセージも続きたいと思っておりますので、よろしくお祈りいたします。

今日私たちが招いて下さっている旧約聖書の4番目に記録されている‘民数記’という神の御言葉です。

“民数記”という聖書は名前通り“民たちの数、人数に関する御言葉だという意味であります。英語では‘Numbers(数を数える意味)’と言われております。民の人数ってどんな意味があってこの聖書のタイトルにまでなっているのでしょうか。

実際民数記を1章から読み始めると、早速イスラエルの各部族について数えている数字の内容がずっと出ていますので、つまらなくなっていて読むのをあきらめたくなくなるかも知れません。

はたしてこの民数記がつまらなくなるほど意味がない聖書でしょうか。その民の人口調査の数字にどんな意味が含まれているのでしょうか。今日はこの疑問を持って民数記の御言葉に入って見ましょう。

<1. ①民数記の御言葉は?>

さきほど読んだ本文の背景と意味をもっと理解するためには、民数記の前後の歴史的背景を知る必要があります。以前、申しましたが、創世記は神様の創造からヤコブの家族70人がエジプトに移住するところまで記録されています。そして、エジプト記で430年を過ごした後、神様のしもべモーセをとおしてエジプトを出てからシナイ山までたどり着く3ヶ月間の旅程が記録されたのが出エジプト記でした。出エジプト記の内容は出エジプトの全過程が記録されているように思われますが、実際出エジプトはたった3ヶ月だけの旅程だけが記録されています。そして、先週我々はイスラエルの民がシナイ山での約1年間滞在している間、神様からいただいた律法とおきてが記録された御言葉がレビ記であることが分かりました。レビ記の次に出る民数記はシナイの荒野を出発して神様の約束の地であるカナンに近くである**モアブの平地(草原)**に至るまでの38年間の歴史が記録された聖書です。

<②2回の人口調査>

民数記の特徴は二つがあります。一つ目は、民数記は一つの地名から始め、ほかの地名で終わっています。民数記1章1節では、‘シナイの荒野’が出て最後の26章3節以下では‘モアブの草原(平地：plains of Moab)’という地名が出ています。つまり、民数記はシナイの荒野から始め、モアブの草原に至るまでの38年間さまよう歴史が記録された聖書です。

二つ目に、民数記では2回の人口調査が記録されています。そういうわけでこの聖書が民数記と呼ばれるようになったのです。1章1-2節を見ると、“人々がエジプトの国を出て二年目の第二月一日に、主はシナイの荒野の会見の天幕でモーセに告げて仰せられた。「イスラエルの全会衆を、氏族ごとに父祖の家ごとに調べ、すべての男子の名をひとりひとり数えて人口調査をせよ」”神様はレビ人や女、子供たちをのぞいてイスラエルの民の中20歳以上の戦争に出れる男子の数を数えるようにと命じられました。氏族ごとに、父祖の家ごとに数えるように、そして、それにしたがって数える内容が記録されています。民数記1章46節に数えた総計が記録されています。その数は60万3千5百50人でした。

それから荒野の生活の終わり頃、カナンの地に入る直前、モアブの草原というところに着きます。荒野の生活が終わろうとしている時点で神様はふたたび、38年前にさせた人口調査を命じられます。(民数記26章3-4節、レビ人、女、子供たちのぞいて)民数記26章5節以下を読んでみると再び氏族ごと、部族ごと数えられています。26章51節にも戦争に出れるイスラエルの男子の総計が記録されています。その総計が60万1千7百30人でした。この二回の数えによってこの聖書が“民数記”に呼ばれるようになったわけです。

<2. 二回の人口調査をとおして教えられる事実:だった二人だけが!>

この二回の人口調査の内容をくわしく調べてみると、とっても大切な意味があることがわかります。シナイの荒野で数えたイスラエルの民60万3千5百50人をなぜまた調査し数えたのか?と思われるかも知れません。しかし、シナイの荒野で数えていた60万3千5百50人(20歳以上戦争に出れる男子の数)大体は荒野で死んで、38年が過ぎてモアブの草原で数えた人口

は以前と同じ人々ではなく、新しいその子供の世代の人口が60万1千7百30人だったということです。ところが、もっとおどろくことは、ほとんどが変わった人たちでしたが、シナイの荒野の時も、モアブの草原の時も含まれていた二人がいます。その人物の名前がヨシュアとカレブという人でした。その意味は新しく変わった世代と共に以前世代として一緒に神の約束地について入れられた人はこの二人が唯一だったという意味にもなります。

民数記26章64-65節をもう一度読んでみましょう“しかし、このうちには、モーセと祭司アロンがシナイの荒野でイスラエル人を登録したときに登録された者は、ひとりもいなかった。65 それは主がかつて彼らについて、「彼らは必ず荒野で死ぬ。」と言われていたからである。彼らのうち、ただエフネの子カレブとヌンの子ヨシュアのほかに、だれも残っていなかった。”

ほかの人々は荒野でほとんど死にました。38年荒野の旅程の後モアブの平地(草原)でまた数えられた60万1千7百30人の中、ヨシュアとカレブ以外は荒野で生まれた第2世代の人たちでした。これがまさに民数記が教える大切な数です。これをとおして神様はどんなメッセージをあたえてくださっているのでしょうか？

<3. 最後まで生き残って約束の地に入られたカギ>

シナイを出発した人々はみな荒野で死んだのに、どうやってヨシュアとカレブだけが生き残って38年の間、二回の人口調査の時にも含まれ約束の地にまで入れることができたのでしょうか？これは偶然だったのでしょうか？ヨシュアとカレブという人たちが特別健康の体質だったからでしょうか？これが民数記で我々が解くべき宿題です。それと同時にこれが、民数記が我々に教えるようとしている核心的なメッセージでもあります。

この民数記のメッセージを解明するカギが民数記13章と14章です。時間があれば、ご一緒に読みたいですが、今日の本文を通して一部だけ読みました。すでに、この内容をご存知の方々も多いと思いますが、簡単にまとめてみます。

イスラエルの民がパランの荒野のカデシュに着いた時、ついに目的地である約束の地であるカナンに入る前にまず12人の偵察者を送りました。彼らは40日の間、カナンに住んでいる人々、土地の状態、重要生産物、住民の特徴、軍事的状況、住居の形など、精密に調査して、報告をするわけです。それが民数記13章26節以下の内容です。ところが、12人のうち10人の報告はとつても否定的でした。彼らの結論は決して自分たちの力ではカナンの地を征服することはできないという報告だったのです。砂漠で疲れ果てている旅人の我々イスラエルの民はカナンに住んでいる巨人たちの前ではいながらの存在であって、彼らは鉄の武器をもって、丈夫な城壁をもって、力強いので、彼らを攻め上ることは不可能であると、だからエジプトに戻ろうと主張したのです。これを聞いたイスラエルの全会衆はみな絶望と落胆に陥って、神様と指導者のモーセとアロンにつぶやきました。そして彼らは具体的に別の指導者を立ててエジプトに戻ろうとしました(14:4)。

愛する信仰の家族のみなさん！一度想像して見て下さい。民数記14章1節以下を読んでみると、パランの荒野に集まった約200万人のイスラエルの民が大声をあげて叫びながら、神様と指導者につぶやきながら、荒野で死ぬよりエジプトに戻って死ぬほうがましだと夜通し、泣き明かします。

しかし、12人中二人、ヨシュアとカレブの主張は彼らと違いました！

13章30節です。“カレブがモーセの前で、民を静めて言った。「私たちはぜひとも、上って行って、そこを占領しよう。かならず、それができるから。」10人は「決して攻め上ることはできない」と言いましたが、ヨシュアとカレブだけは“かならずそれができる”と確信したのです。そして、14章6-8節をみると、“すると、その地を探って来た者のうち、ヌンの子ヨシュアとエフネの子カレブとは自分たちの着物を引き裂いて、7 イスラエルの全会衆に向かって次のように言った。「私たちが巡り歩いて探った地は、すばらしく良い地だった。8 もし、私たちが主の御心にかなえば、私たちがあの地に導き入れ、それを私たちに下さるだろう。あの地には、乳と蜜とが流れている。」結局、イスラエルの全会衆はこのように信仰の報告をしていた二人を石打で殺そうとまできました。(14:10)この異なった報告と態度がイスラエルの民の運命を分けました。報告の違いが命と死を、約束の地に入れる事と入れない事を決めたのです。

<4. ヨシュアとカレブはどうやって強く確信できたのでしょうか？ その根拠>

疑問に残っているのはヨシュアとカレブはほかの10人と同じく現実を見てきたのにもかからわず、どんな根拠によってかならず攻め上れると考えたのでしょうか？

ヨシュアとカレブはほかの人が見れなかったほか何をみたのでしょうか？二人も丈夫な城壁も見ただろうし、巨大なアナック人とネフィリム人を見ただろうし、カナンの軍事力も見たのにもかからわず、どんな根拠でかならず、勝てると思ったのでしょうか？この内容が14章の内容です。同時にこれが私が今日みなさんに申しあげようとする核心でもあります。

14章を注意深く読んでみると二人の核心の根拠は絶対信仰ありますが、具体的にどんな絶対信仰だったのか三つのポイントでまとめてみたいと思います。

一つ目の根拠は、以前も、いまも、これからともにおられる神様を信じる絶対信仰があったからです。(14章9節)

14:9“主にそむいてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちのえじきとなるからだ。彼らの守りは、彼らから取り去られている。”そして次にとつても大切な御言葉が出ます。“主が私たちとともにおられるのだ。(the Lord is with us)”現実的には乗り越えないことばかりかもしれませんが、主が我々とともにおられるという確信があったので、かならず攻め上れると報告することができたのです。主が我々とともにおられるという確信は目の前の落胆や絶望、人間的な限界にも乗り越えることのできる信仰と確信の根拠そのものでした。

“たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れませんが、あなたが私とともにおられますから。”(詩篇23:4)

二つ目の根拠、神様の御力への絶対信仰と望みを逃がさなかったからです。(14章11節)

14:11“主はモーセに仰せられた。「この民はいつまでわたしを侮るのか。わたしがこの民の間で行なったすべてのしるしにもかかわらず、いつまでわたしを信じないのか。」そして22-23節をみてみてください。“エジプトとこの荒野で、わたしの栄光とわたしの行なったしるしを見ながら、このように十度もわたしを試みて、わたしの声に聞き従わなかった者たちは、みな、わたしが彼らの先祖たちに誓った地を見ることできない。わたしを侮った者も、みなそれを見ることできない。”

神様は数え切れないほど荒野の40年間の生活のなかで、ご自分のイスラエルの民を守り、導いて下さいました。イスラエルの民族の知恵や状況に関係なく神ご自身が直接民を食べさせ、着させ、火の柱と雲の柱で導き、数多くの戦いに神様の御力とするして彼らを助け、勝利させました。それにもかかわらず、約束の地でもにして下さる神様を信じないで、つぶやいているイスラエルの民をしかっているのです。

しかし、ただ二人、ヨシュアとカレブだけはいままでの神様と導きや、これからもともにおられる神様への信仰と信頼と、望みを失いませんでした。つまり、ヨシュアとカレブだけがいままで導いて下さった全能の神様がこれからもかならず導いて下さるということを絶対的に信じていたのです。いままでのさまざまな奇跡やしるしで神様の臨在を表してくださった神様が目の前にある不可能なことさえもできるようにさせる。つまり、カナンへの地に入ることができると信じたのです。なのに、神様の民だと言葉では言っていたイスラエルの民は、実際に神様を心から信じませんでした。そして、神様への望みさえも失ってしまったのです。神様を信じる者の特権であり、祝福である神様へこの絶対信仰と神様への望みをこのヨシュアとカレブは目の前にある障害物があるからといって失いわず最後まで従い通したのです。

三つ目に、ヨシュアとカレブの核心の根拠は、神様の約束を信じる信仰にありました。

民数記14章23節をみてみてください。カナンへの地を何と言いますか。“先祖たちに誓った地”だと言っています。そして30節では**“ただエフネの子カレブと、ヌンの子ヨシュアのほかに、あなたがたを住ませるとわたしが誓った地に、だれも決してはいることはできない。”**“ここでもカナンへの地を“わたしが誓った地”だと言われました。カナンへの地をすでにイスラエルの民に与えると約束された地である事を強調しています。つまり、イスラエルの戦闘力や力、なんの関係なくすでに、先祖たちに与えると約束されました。ヨシュアとカレブにはこの神様の約束を信じる絶対信仰がありました。カナンへの地への約束はすでに創世記から与えられています。まずアブラハムにです。“(創世記17:8)(わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。)”

続いてイサクにも約束されました。“あなたはこの地に、滞在しなさい。わたしはあなたとともにいて、あなたを祝福しよう。それはわたしが、これらの国々をすべて、あなたとあなたの子孫に与えるからだ。こうしてわたしは、あなたの父アブラハムに誓った誓いを果たすのだ。”(創世記26:3)

ヤコブにも約束されました。“わたしはアブラハムとイサクに与えた地を、あなたに与え、あなたの後の子孫にもその地を与えよう。”(創世記35:12)

出エジプト6章8節にも約束されました。“わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓ったその地に、あなたがたを連れて行き、それをあなたがたの所有として与える。わたしは主である。”

出エジプト13章11節、シナイ山でおきてを与える時も神様はこの約束を忘れないように約束して下さいましたが、繰り返される神様の約束を10人の偵察者から始めイスラエルの民は信じなかったのです。人の約束はやぶれることもあり、変わることもあり、破棄される時もあります。しかし、神様の約束は決して破棄されることがないことだけは忘れないでおきたいです。かならず、神様の方法で神様の約束が成就されることを最後まで握って下さい。この破棄されることのない神様の約束への信仰、これがまさにヨシュアとカレブが最後まで生き残って約束の地カナンへの地に入れるようになったのです。

もし、みなさんの中に、目の前においてあるこまったことで、自分の力では不可能だと思われていることなどで、神様の約束や望みへの絶対信仰が揺るがされている方々はいませんか。

この民数記をとおして、自分の信仰をイスラエル人たちの信仰に照らして見て下さい。自分の信仰はイスラエルの民族のように漠然として、いつも口先だけの信仰ではないのか。ヨシュアとカレブのように絶対信仰を失わないでいられるのか。イエス・キリストからの救いと望みと約束を信じているといいながら、ぶつぶつぶつぶやいている者ではないのか、それともヨシュアとカレブのように永遠の約束と安息を信じて最後まで信仰を握るものになるのか。

結局、シナイの荒野を出発した60万3千5百50人が砂漠でしぬしかなかったのは、自分たちの不信仰の罪のせいでした。選ばれたイスラエルの民が大事ではなく、口先だけ神を信じるということが大切ではなく、ヨシュアとカレブのように心から、絶対的に神様を信じる信仰を持っているのが大事です。民数記14章22節以下を見ると、“エジプトとこの荒野で、わたしの栄光とわたしの行ったしるしを見ながら、このように十度もわたしを試みて、わたしの声に聞き従わなかった者たちは、みな、わたしが彼らの先祖たちに誓った地を見ることできない。ただし、わたしのしもべカレブは、ほかの者と違った心を持っていて、わたしに従い通したので、わたしは彼が行ってきた地に彼を導き入れる。彼の子孫はその地を所有するようになる。”と言われました。これこそが、民数記を解き明かすカギではないかと思えます。

シナイの荒野を出発した60万3千5百50人が荒野でみな死んで、38年が過ぎた後、ヨシュアとカレブだけがモアブの草原にまで

生き残れたのは彼らが病気がなく、健康だったからではないことが分かりました。ただ一つ。神様への絶対信仰、そして全能なる神様への望みと変わる事のない神様の約束を最後まで握る信仰があったからです。神様は今日イエス・キリストを救い主として信じ受けた我々も最後まで揺るがない信仰を持つようにと願っておられます。

<まとめ>

約38年の間、この2回の人口調査をとおして神様は信仰の家族に何を教えて下さっていますか。 **60万3千5百50人**から38年後 **60万1千7百30人**になりました。形の人数は似てますが、結局不信仰の世代はみんな神の約束されたカナンの地には一人も入れず、荒野でみんな死にました。しかし、最後まで絶対信仰を持って従い通したヨシュアとカレブ、そして新しい信仰の世代が約束の地に入ることができました。

神様への信仰を失わないように、神様への望みを失わないように、約束を真実に守っておられる神様に従い通すようにと願っておられます。我々もこの荒野の地で生きる時様々な悩みや苦しみに会います。時々、健康を失う時も、愛する家族と死別する時もあり、失敗する時もあります。信仰生活をするとき、思いもしなかった不幸にあうときもあります。しかし、落胆しないで下さい。困っていることがあるからと言って、絶望したり、神様への信仰が揺らいで、ふたたび不信の道に戻ってはいけません。いままで、我々を導いてくださった神様、いままでともにおられた神様が、これからも我々とともにおられ導いてくださいます。そして、忘れないで下さい。いまも神様はわれわれとともにおられます。約束に真実な神様は我々に対する祝福の約束をかならず守ってください。

自分たちだけではなく、我々の子孫たちもヨシュアとカレブのようにこの絶対信仰をもって、神様への望みと約束をいだいて、生活するようにと祈り、助けるべきだと信じます。荒野のような人生の旅路においても神様を信じる絶対信仰によって神様の祝福を経験し、神様のみをみあげ、神様の約束の成就を最後まで信じ、経験される全クリスチャンプレイズチャーチのみなさんとなりますよう主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン!